詩集

白焰

西曆一千九百三十一年

百二十部限定版第五拾貳號

所藏

東京都千代田区神田錦町一丁目七番地
小林記録紙株式会社

詩集

西歴一千九百三十年版

わが畏友

柿崎守忠氏に

著者に就いて

★一九〇七年青森市に生る。

★一九二五・二六年天主教會の小房に居す。

★一九二五年青森中學校、翌年師範二部卒。

★一九三〇年、詩作生活の一つの清算として『白い焰』上梓。

白い焔

一九二六年

小林記録紙株式会社

天使祝詞

アヴエ、マリア、グラチア、プレナ……
雨の日の陰鬱な朝に、
蜜蠟の餘煙一すぢにのぼる。

サンタ、マリア、マテル、デイ……
ほの暗く濕つぽい聖堂に
合掌の掌は解けず。

——1925.8——

小林記録紙株式会社

思　慕

澄みきつた穹隆に、
白い雲が飛んでゆく。

風はひよう〳〵と寒いが、
雪解けの麗らかな陽ざしである。

ああ、わびしいうづくまつた靈からたち上る、

天空への果しない思慕よ——

澄みきつた穹隆に
白い雲が飛んでゆく。

純情

冴えてゆく神經に遠く汽笛の餘音がする。交錯した思索は闇にきらきら輝く星の紫の感情を見出だす。ああ、待て暫し、純なりし、一途なりし、昔の戀が、片想ひが、よみがへつてきたではないか。

闇に光つて、消えて、紫に、光つて、消えて、ぴかぴかする、星だ。たつた一つ、私の、昔の、純の、一途の、感情だ。

ごすぐろい、汚い、ごぶ底の靈に、一こすぢに燃えたつた、むかしの、むかしの、懷出はああさんさんと涙流るる。

春宵

ゆるやかに薄れゆく陽ざしに、春の日はおごもなく暮れて、華やかな灯にわびしい感情はほのかにうち震ふ。

蒼み渡り、大空は一面に限りなき愛撫の情(こころ)、そのなかに、星の、愛戀の、純情の、可弱い紫のひらめき——

ああ、さつこ病室の窓にかけるまごはしき女の影、その下のくら闇の庭にうごめく犬のやるせない情慾の悶え——

傍の、一本の、松の木は、ゆらめいてくる春宵の、快よい誘ひの、戰慄(おのの)を戰慄(おのの)を抑へんこする。

酒

この快よき陶酔よ、カップ一つに盛られたるこの快よき陶酔よ、水底(みなそこ)の月を捕へんとする果しなき感傷の情(こころ)よりも、わびしき情緒を得んとして躍り上る空しき心よりも、この芳醇さより醸し出される現實のこの陶酔よ。

月

ああ、われは逍遙(さまよ)ふ空の旅人である。赤くたゞれた情熱に身は燒かれて果しなき暗闇を摸索する空の旅人である。燦めく星影の戰きに蒼白き法悦を得んとすれど流れはあまりに速くして哀しく漂ひゆく。ああ、われは逍遙ふ空の旅人である。

小曲

うき草は水面に浮きて
そこはかゝ漂ひゆきぬ。

灰色の室にさしたる赤き悶に
ふと見上ぐれば——

うき雲は眞蒼の空に
しろ〳〵と流れゆきけり。

月

樹の葉洩る圓かな月よ、
銀の滴を落とす。

愛しき女眠れる窓に、
行くや、汝、夜の使者よ、

忍びかに、傳へてよ、君、
ほの蒼き、街の路に、
佇める、せつなき戀を。

半　月

今宵半月の懸かれり、
銀(しろがね)の光、
わが小窓より入り込む。

冷き微笑なるかな、
そは泣かざらんとして笑ふ、
ピエロォの苦悩にも似たり。

空しき望抱きて、
暗き街に佇む、
愛人(ひと)戀ふる心にも似たるかな。

あはれ、半月よ、
眞黑き空に、
汝(なれ)もまた割られたる片身(かたみ)想ふや。

紫陽花

ざわ　ざわ　ざわ　ざわ
開いた蛇の目——

宵暗に青白く煙る
うなだれた一群の紫陽花、
そこはかとなき哀歡の漂ひに、
溶け合つてゆく泣き濡れた私の靈よ。

うるんだ瞳に見つむる街燈は、
暈かされた情緒の古風な圓舞曲に、
夢のやうに、ああ夢のやうに悲しく
明日の希望を瞬きする。

ざわ　ざわ　ざわ　ざわ
開いた蛇の目に
快よい陶酔の律である。

風景

これは淋しい秋の日の風景である。

二、三日來の雨の合間、
空は一面の灰色に
かなしく感情の枯渇を吐息する。

さつと吹き流れ、
過ぎてゆく風の寒さに、

そよげる泥樹の葉裏葉裏の、
ほの白き愁もせんなし。

ああ、和げる常時を棄てて、
むなしく激情を波だたせ、
はかなく砂に呑まれゆく海の相よ。

これは淋しい秋の日の風景である。

祈り

くもり日の空のやはらぎ、
薄ぐもるくものなかより、
紫のあはきかげ出で、
溶け合ひて一つに流る。

ほのぐらき街をみれば、
屋根屋根はにぶく光りて、
憂愁のかげはかなしく、

奥深き森のさびしみ。

かゝるとき頭を垂れて、
ただひとり祈らまほしし、
神はなくともひざまづき、
ただひとり祈らまほしし。

幸　福

なぜ明日をかんがへるのか、
明日は幸福であるこでもいふのか。

かうして火鉢で話してゐるだけでいゝではないか、
かうして机に本を讀んでゐるだけでいゝではないか。

黄いろくなつたポプラの樹を跳め、
紫の山の白い雲を眺め、
屋根びさしの鳩を眺める。

かうしてゐるだけでいゝではないか、
なぜ明日に幸福を探そうこいふのか。

白日

白日、
冷き風流れ、
晩秋の樹樹は、
空しき腕を交す。

空、乳色に煙り、
屋根瓦の鈍き反映に、
ただ一もと柳ゆらめき、

婆婆たるその姿。

ああ、饒舌はなくて、
白日、
冷き風流る。

一九二七年

夕

ほの白く霞める彼方、
林、森、息づく如く、
組み交ひし觸指伸ばせる、
おぼろなる大空の下。

雪解けの舊き線路に、
凧上げし兒等二つ三つ、
喧しき聲こだまして、
暮れてゆく淡きむらさき。

街燈

しめやかに
雪が降つてゐる。

街の燈は
あはくまごろんで
遠くかなしい
想をさそふ。

埋もれた戀を懷ひ、
はかない戀を懷ひ、
さびしい女の瞳を想ふ。

雪が降つてゐる、
しめやかに、秘かに、
雪が降つてゐる。

雪の夜

さあ、おやすみ、
幼い弟よ、

しづかに、しづかに、
雪が降つて——
だが、雨戸が、
がた、がた
なつてるよ。

さあ、おやすみ、
そんなに愚圖らないで。

遠く波止場では、
もうたあさいれんが鳴つて、
ああ、こんな晩には、
恐い、
雪女が出るかもしれないよ。

信號燈

霙のなかの
畦道の信號燈(シグナル)である、
赤、青の信號燈である。

私は私の悲しい影を見つめる。

蒼白く雪明りした山の端は、
寢棺によこたはる冷い瞳のやうに、

靜であり、死であり、冬であり、あきらめであり、
私のうち震ふ靈である。

(かたちのない花びらを想ふ。)

私は私の悲しい影を凝視め、
畦道の信號燈を戀ひ慕ふのである。

影

午後の窓に
落ち込んだ陽ざし——

（私はそれを凝つ（ぢ）みる）

私は深山の奥に
人の行かない沼地をみる、
底知れない淵瀬をみる。

私はそこに置き棄てられ、
どうすることも出來ない自分をみる。

春の柔い午後の陽ざしに、
孤（ひと）りなる私の靈の
かなしい影を凝視むる。

夜の雨

雨は降る、
夜の街に。

濕りたる、
路の上に、
影長き、
燈火や。

雨は降る、
頰は冷く、
我が靈の、
咽び泣く音。

聖母讃頌

蜜蠟のたゆたへるなか、
聖子抱ける眞白き像。

アヴエ、マリア……
アヴエ、マリア……

聲は和し聲は唱ふ、
念珠のかそけきひゞき。

愛すべき聖母よ、
充らざるものなれど
慕ひまつるこの靈を受け給へ。

サンタ、マリア……
サンタ、マリア……

聲は無く聲は聞ゆ、
この和唱いづくより來るや。

權力ある童貞よ、
春宵の、朧ろなる夜の、
あやしき震へをこり給へ。

アヴエ、マリア……
アヴエ、マリア……

いと崇きロザリオの元后よ、
深く沈淪める
わが霊を懐ひ給へ。

ゆらめき、這ひもこほり、
蜜蠟の餘煙一すぢにのぼれば。

船燈

海面にしぶく雨脚、
十字架となり、
沖はほのかに煙る。

ああ、船燈は未だ見えず、
今宵は冷い雨である。

一九二八年

春

草屋根に、
陽は麗ら。

雪溶けて、
空も蒼めり。

トラピストにて（一）

修道院の春は靜寂にして、
彼方——
海峽の波濤は蒼し。

蜜蠟塗りて映ゆる廊下に、
煉獄の聖母、
青き紗に包まれたり。

贖罪終へし罪人の、
あはれ、榮冠を受けんとして、
合掌す手先よ。

行き交ふ祈禱修士の、
灰色の長き衣に、
伏せる瞳は尊し。

トラピストにて（二）

眞晝——
ほの暗き聖堂に額づく、
樺色の修士あり。

聖像はみな
四旬節の紫にて覆はれ、
聖体の前に、
小さき灯のみともれり。

祈禱修士の彌撒本に
映ゆる光よ。

ああ、見ずや、
この靜寂に膝まづく、
彼の助修士の面を。

われ、この瞬時、
大いなる者の存在を感知せり。

トラピストにて（三）

坂道にふと出で會ひし
樺色の若き助修士、
肥料積みし車輪を走らせたり。

われ、振り返りたれば、
彼方も返り見てあり。

わが心、
抑へ難なき憂鬱につゝまれたり。

獵騎兵

憂、憂、憂……
碧空に躍る蹄の音。

街の城門はひろびろと開け、
未だし見ゆぬ賓客を、
遙か、森の彼方に待望する。

憂、憂、憂……
何處より來るや、

碧空に應ふ蹄の音。

森こ街を連ぐ一條の並樹路は、
濃綠の葉なみ葉なみにうねり、
微風の、六月の、光こ陰、
爽々たるその風景に
ああ、聽け、遠く
角笛の朗らかな冴え。

戛、戛、戛……
蹄は碧空に反響して
はや、わが Chevalier は近づけり。

寂しい微笑

——物語風に——

その一

温い潮が香ふ、星のない夜、
海面はほの白く映え、うねり、うねる。

魔もののやうに浮動する假泊船のかげに、
きら、きら、搖れる、青、赤の燈火は、
生命のせつない歡びに震えてゐる。

彼方、岸壁に、明るい夢をみる
百燭光の、まごらかさ、華やかさ。

あなた——
それは遠い頃の情景ではないか。

その二

空は燻し銀に、
街の微風は柔らかな感觸である。

道端に忘却された枯れ樹の、
裸はな腕にも媚が含まれる。

だが——
陽陰の沼のやうな男の瞳である。

その瞳は遠い地の果てを凝視め、
抱擁のなかにただひごりなる寂しさを感じる。

その三

女は希望のない世界に
男への呪詛を撒いた。

陽は映り、陽は戻る。
トタン屋根は、遙かに、重なり合つて、
その反映の、あゝ、何ういふいらだたしさ、悲しさ。

男は永遠に孤獨なる人生をかんがへて、
寂しい微笑を女に送つた。

濕つた風景

鈍いねずみの空に
空氣はじめじめと瀰漫する。

古寂びたトタン屋根は、
ほの白く光つて
はかない憂思を映す。

薄暗い地は何處までもつづき、
その上にうづくまる小さい生物の
せつない命よ、生よ。

ひな芥子

想はほのかにけぶる芥子の花、
雨空にたゞひとつ生命ある花。

眞白きは御聖体に合掌する
修道の尼の冠り衣、
蜜蠟のたゆたふ餘煙に
聖子抱ける聖母の像。

朝な朝なわが願ふその日の生活。

うすくれなゐはをとめごのゆめ、
宵やみに浮くをんなの顔、
いつもいつも情につぼみ
夜にひらく花、わがねがひの絹。

花は集ひ　群れ　亂れ、
霧雨に濡れ　今日を咲く。

雲と風と僕と

雲は雲を
空に呼んでゐた
空は蒼かつた　潤かつた。

風は風を
地に追つてゐた
地は涯なかつた　遠かつた。

僕は　僕を
街に探してゐた
街は闇かつた　光るかつた。

瞳

雨が降りそうで降らない日は、
へんに神經がいらだつね。

空がひかり
屋根がひかり
路がひかり

ああ、ころされた死人の瞳だね。

愛執

くびにてをかけむか
しらはにてひこつきにせむか
ひこをなきものにせむこて
ひねもすそのてだてをかんがへ
めははりこころひきしまる
やがては
かくばかりうらみゆくひこのいこしさに
むねせまりきてこゑだかになきふしつ

探索

いつも雨がふる
うすぐらいおもひのなかを
うづくまり　這ひもこほり
けふも止みがたい探索をつづける

蜻蛉

薄陽にもほのかに揺れて
漂へり影のごとくに、
またかすか微風に燻じて
透きひかり流れゆきけり。

秋

燈火微かに震え、
街は門を閉ざす。
水面は冷く映り、
僕は想を祕める。

氷雨

疾走する自動車……
泥濘道を、トタンのやうな空を、
ああ、またしても、雨、氷雨。

今日も港の非常號笛が鳴り續けた。
（今日も僕は女への返事を書かなかつた。）
街は蒼ざめた肺病患者、
もう第三期の吐息してゐる。

人は長い外套の群になつて
蒼皇と過ぎる。

ああ、街燈が點いた、
媚笑しながら　震えながら
軒に佇む淫賣のやうに。

氷雨だ　氷雨　またしても
ほの暗い街に、心に。

希み

飛躍だ——僕の希むのは、
穹窿に湧く羽搏きだ。

眞夜中

眞夜中は凍りついた、
展望臺の赤い燈が動かない。

何がかうも靜かなのか、
僕は石を拾つて
板塀に力まかせにぶつつけた。

一九二九年

秋

いつしか御身は面紗を纏ふ、
いつしか御身は面貌(かもて)を變へる。

いつしか御身は忍び入り、
わが魂に嚴かな框(わく)を塡(は)め込む。

陰性

陽は雲間を洩れて、白々と屋根々々に反映する。この四、五日僕の心性は陽陰の沼に溺れてゐた。雨が降る、ああ、また暴風雨……

うす暗い室に米櫃は空であつた。もはや目ぼしい質草もない。親しい身寄りの飢に苛だつ叫びを耳にして、僕は最後の一聯を、一聯を書かんとする。

置棚の上に塵にまみれて硝子鉢が忘られてゐた。澱んだ水の面には泡が重なり合つて動かなかつた。死人の口元に浮び出る水泡の如く……。水泡の陰に小鮒が四匹、腹を裏返しにして浮んでゐた。凝つと動かない中を第五匹目がばくばく口を開けながら死屍の間を游き廻つてゐた。

旋轉

おお新しき太陽よ、知られざる季節よ。（エフレイム、ミカエル）

何かしら明るい空を、何かしら渦巻く海を。僕はこの陰鬱より拔け出でんとして焦燥する。僕は机上の『惡の華』を擲つ。おお親しきシャルルよ、御身はこの陰慘なる牢屋に震ふる魂もて苦惱の法悅を詩つた。御身は虛空の中に（さらに新しきもの、死）を凝視めた。僕は消え入る魂を抱いてその中に旋轉する。

虛しい空

明るい風景の坂道が遙かにつづいてゐた。僕は一生懸命に駈け上つた。

坂の上には虛しい空、涯のない空、盲目の星。

さめざめと涙して目が覺めた。隣り室から負債をかこつ父母のほそ〳〵聲。

僕はシーツに耳を伏せて虛しい夢を追ふた。

盲の唄

月もない空に蒼白い薄明……。街は泥濘であつた。ほの赤く反り映えてゆく
自動車のヘッドライトの温い夢よ。

唄が流るる、小路の奥に三味持てる盲(めしひ)の唄が……。

街は泥濘であつた。ああ、わが生と死は開くによしなく閉ぢるによしなし。

僕

雲は飛ぶ、陰鬱な空を、街を。梢、梢の急角度の震動(ビブラシオン)……。ごうしたこい
ふのだ、お前、お前、蒼白な顔をして、お前の瞳は雨降りのトタン屋根のやう
だ。お前の髪は僕の掌に飢えた老婆のやうにばさばさしてゐる。
ああ可愛い人よ、僕よ、この季節よ。

荒れた庭先には百日草が真紅に咲いてゐる。

白い焔

あなたは眞晝の焔を見たか。形狀(かたち)なくめら〳〵と燃え上る焔を、白い焔を。

風は音もなくわが腦髓を過ぎる。

午砲

午砲(ドン)……。宵闇は切斷された。芝草はぶるぶる震える。

貪婪の瞳

玻璃の如く凍りついた街。並樹は骸骨となつて十二月の空に掌をかざす。
僕は貪婪の瞳輝く痔犬となつてこの風景を過ぎらんとす。

白

火のない室に感覺は白く凍つて行つた。

冷いもの

冷いもの、たとへば十月の朝の窓硝子のやうな。冷いもの、たとへばきりきりと歯に泌む林檎のやうな。冷いもの、たとへば息の白くなる朝、川に張る薄い氷のやうな。

そんな冷いものがときどき僕の脊を流れる。

白い焔

畢り

白い焔　目次

一九二六年

天使祝詞……9
思慕……10
純情……12
春宵……13
酒……14
月……15
小曲……16
月……17
半月……18
紫陽花……20

風景……22
祈り……24
幸福……26
白日……28

一九二七年

夕……33
街燈……34
雪の夜……36
信號燈……38
影……40
夜の雨……42
聖母讃頌……44
船燈……47

一九二八年

春……51
トラピストにて(一)……52

トラピストにて(二)……54
トラピストにて(三)……56
獵騎兵……57
寂しい微笑……59
濕つた風景……62
◎ひな芥子……64
雲と風と僕と……66
瞳……67
愛執……68
探索……69
蜻蛉……70
秋……71
氷雨……72
希みの……74
眞夜中……75

一九二九年

秋……78
陰性……79
旋轉……81
虚しい空……82
盲の唄……83
僕……84
白い焔……85
午砲……86
貪婪の瞳……87
白……88
冷いもの……89

詩集　白い焰

昭和五年二月一日印刷
昭和五年二月五日發行

限定●版百二十部
定價　壹　圓

青森市浦町野脇三六ノ一
著作者　藤　田　金　一
青森市國道通高橋病院向ヒ
發行者　小　山　義　正
青森市米町五八・五九
印刷者　駒　谷　光　雄
青森市米町五八・五九
印刷所　株式會社　啓　明　社

青森市國道通高橋病院向ヒ
發行所　新　興　書　房